映画めぐり１
「えー。おせんにキャラメル」

良一

映画めぐり１　「えー。おせんにキャラメル」

私が小学生の頃は、ラジオを聴く楽しみがありました。浪曲・広沢虎造の「清水の次郎長」や玉川勝太郎の「天保水滸伝」など、また天中軒雲月という浪曲士の美声は、「すかっ」として、サイダーを飲んだようでした。

もちろん娯楽はラジオだけではありません。当時、映画は娯楽の王様でした。王様だけに製作費にお金がかかったようです。

このころ無声映画がトーキーに進化し、トーキー化の資金を回収するため映画会社は懸命に生産し、それに伴って多くの役者の育成があったのです。映画はしだいに花形産業として恵まれた環境へと転換していきました。

小さかった頃、私が在住していた京王線の沿線に「代々幡映画」、「笹塚館」という小便くさい町はずれの小屋があり、封切りしてから一、二年後にやってくるフィルムは新派と、時代劇の二本立てでした。

映画は、私にとっては社会感覚を育ててくれた最高の学校でした。映画が好きで見るたびに自分が充実して、えらくなったと、そのような思いがしたものです。このため親の用事や、頼まれごとはすすんでやりました。目的は駄賃をもらうことで、せっせと貯金して映画を見る資金をつくりました。

その時代、映画館にいくことは後ろめたいものがありました。

当局からの『学校生徒単身入館禁止』(保護者と一緒であること)なる通達があった故で、切符購入時は窓口で年齢を聞かれたものでしたが、必ず二つ、三つ、よけいに適当に返事をしたことを覚えています。

新宿は、映画をかける劇場の多い場所でもありました。昔むかしの新宿の小屋のようすを当時をふりかえり、紹介していきたいと思います。

まず筆頭に『朝日ニュース劇場』をあげておきます。ここはニュース専門の小屋で、内外のニュースのほか、「ポパイ」や「オリーブ」などの漫画映画なども上映していました。

それから洋画専門の小屋は「武蔵野館」といい、アメリカの西部劇が主力でした。

さらに時代劇専門の小屋がありました。「大都映画」といって、日活、松竹に比較したら小さな会社でした。

素浪人もので近衛十四郎(今の松方弘樹の父親)が主役で、対する敵役・悪役はといえば、安部九州男が活躍していました。・

素浪人物は、天衣無縫というか、ゆっくり安心して活劇を楽しませてくれた、と思います。

それからちょっと寄り道して、劇場の中の売店についてもふれておきます。

松竹大劇場の売店には品格があった、そのように思い出します。弁当らしきものを売っていて私は横目でチラチラ。買うつもりもないのに……。

　そうそう。まだ、話をしていない小屋がありました。新宿から南に二キロの「淀橋」、そこに「淀橋映画劇場」がありました。ちょうどいまの「ヨドバシカメラ」の隣にあったのです。「ヨドバシカメラ」は当時から有名でした。そこの小屋では、エノケンやワイズミュラーのターザンを見たものです。

　さて、この映画をめぐる小さな旅も大詰めになってきました。
　映画には十八番、という当たり役があります。たとえば、鞍馬天狗は嵐寛寿郎、大河内伝次郎は「丹下左膳」、原健策は「まぼろし城」というもので、主役は取り替えたりしたりできないといったものでした。
　それから、そうそう、こんな思い出もあります。映画が古くて劣化してくると、フィルムが上映中、切れることがしはしばあり、フィルムを映写技師が慌ててつなぎなおしているあいだ、少しの間ですが、映画が中断することがありました。
　そんな時は大声を出して、「まただ！」と非難を送ったものでした。

　映画で特に脳裏に残っているのは『路傍の石』です。主役の片山明彦の明るい演技は、いまでも心に残っているほどです。
　エノケンの『ちゃっきり金太』は喜劇映画の傑作で、「弱きをたすけ、強きをくじく」をテーマに、こんなふうないろいろと教えられ、考えもさせられる映画がいくつもいくつもあったものです。

　おっと。脱線してしまいましたね。
　映画については、まだまだ語り尽くせぬものがあります。
　別の機会に、さらに私の記憶の中でいまも上演されつづけている映画や、映画館のあれこれについて語っていくことにします。
　どうぞお楽しみに。